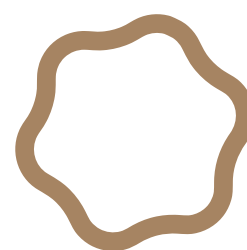


hgu_LAB. MAGAZINE

015



Apr 2023

vol.

POLLINATOR

Wakana Takahashi



HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY

シロクマが
ハワイより北極で
生きるほうを選んだ
からといって、
だれがシロクマを
責めますか。

梨木香歩『西の魔女が死んだ』より

Wakana
Takahashi

高橋 和佳奈

北海学園大学 人文学部 1 部
英米文化学科 3 年（取材時）
北海道札幌国際情報高等学校出身

札幌生まれ。高校の同級生だった 3 人でフードロスの削減をテーマにした「おもしろ野菜マルシェ」という活動を展開中。農業生産者にとって販売がむずかしいとされる規格外野菜を取り扱うマルシェの開催をはじめ、飲食店や一般消費者への販売などを手がけている。上の一文は、読書好きの高橋さんが選んだ、お気に入りのフレーズ。高橋さんのライフスタイルの根本にある「自分らしく生きる」という姿勢が表現されている。



野菜のフードロス問題に取り組み、 2年間で7トン削減できました。

色や形、大きさなどによって、正規品になったり規格外品になったりする野菜の世界。
もしもあなたがブロッコリーだったなら、選別検査を受ける前に何を思うだろう。
きっと高橋さんなら「お好きにどうぞ、どちらになってもわたしはわたし」と言い切るはず。
でも、規格外になってしまうと出荷もままならないという問題が……。
そこで高橋さんたちは、規格外野菜を多くの人に味わってもらうために奔走しています。
人であれ、野菜であれ、なんであれ、誰もが自分らしく生き、その価値が閉ざされずに
ほかの誰かに届くなら、世の中はもっとおもしろくなる……ですよね、高橋さん？

ゼロから始めた野菜売り

—— さっそくですが、高橋さんが取り組んでいる「おもしろ野菜マルシェ」について教えてください。
大学は別々なんですけど、高校の同級生だった3人で活動しています。その名のとおりマルシェを開催したり、飲食店さんに野菜を卸したり。なかなか市場に出回らない規格外野菜を積極的に扱って、フードロスの削減に少しでも貢献できればと考えて始めました。

—— マルシェはどこで開催しているんですか？
最初は手稲神社の境内でやらせてもらいました。マルシェができる場所を探しているとき、高校の同級生が手稲神社の息子さんだったこともあり、無料で使っていいよと言ってくださって。2年生の夏休みから秋にかけて週2回のペースで行いました。3年生からは不定期開催となり、ラジオ局主催のイベントなどに店出させていただいたりと広がりが出てきています。

—— 野菜の卸しはどのように？
たとえばブロッコリーの場合、週に3回、飲食店さんに配達をしています。配達の日は朝7時ごろに車で家を出て、ブロッコリーを育てている農家さんがある長沼町へ受け取りに行き、その足で札幌市内の店舗さんを巡るという流れですね。わたしはそのうち週2回を担当しています。個人の方にもメルカリで販売していて、これは宅配便で送っています。自宅の近くに借りている倉庫へ自転車で行き、野菜が入った段ボールを自転車の荷台に乗せてバンドで固定し、宅配便の営業所に持ち込み、そこから大学に行くという感じで（笑）

—— 扱っている野菜の種類は？
ブロッコリー、ラディッシュ、トマト、お米、きくらげ、きゅうり、ズッキーニ、かぼちゃ、じゃがいも、たまねぎ、ミニ白菜、越冬にんじん…という感じでけっこういろんな種類の野菜を取り扱っています。

—— なるほど、本格的ですね。どうやって農家さんや飲食店さんとの関係性を築いていったのですか？
わたしたちは何の実績もなかったの、とにかく足で稼ぐしかない、札幌市内や近郊の農家さんが集まっている地域に行き、「あれ農家さんじゃない？」という人に直接、「すみません、わたしたちこういう企画をやっています。よかったらお話を聞いていただけませんか」というふうをお願いをして。それで最初は数軒の農家さんと一緒にやらせていただくことになり、少しずつその輪が広がって、いまは30軒ほどの農家さんにお世話になっています。飲食店さんにはまず電話をかけてアポを取り、資料を持参して説明をさせていただくという感じで、10店舗ほどに卸しています。

—— 行動力がすごい！
代表の松浦（p.5に登場）は高校時代から、やろうと決めたことに対する遂行力がすごくて、わたしたちのエンジンになってくれてます。わたしもその勢いにのって、いろいろ動いているという感じですね。

規格外だっておいしい

—— そもそも規格外野菜に注目したのはなぜ？
同級生だった3人で何かやろうとなったときに、誰かの役に立てることをしたいという話になり、自分

たちが興味のあることをひたすら書き出していったんです。動物虐待をなくそう、植林をしてみよう、DV、女性の人権、LGBTQ…いろいろ話すなかで、自分たちがいますぐ動けてかたちにできそうなものとして、フードロス、規格外野菜の問題に取り組むことに決めました。

—— どういう野菜が「規格外」になるんですか？
野菜ごとにS・M・Lなどのサイズが定められていて、それらに当てはまらないもの、つまり小さすぎても大きすぎても規格外になってしまいます。さらに色や傷などいくつかの項目をクリアできなければ規格外ですね。食べてみれば、品質的にはまったく問題ないものがほとんどなんですけど、規格外になると買い手がつかず、廃棄処分されてしまうことが多いんです。

—— それなら安く買い取って、少しでも流通させたほうがいいということですね？
農家さんにとっても社会にとってもベストなのは規格の範囲を大きくし規格内でも規格外でも同じ価格で販売できることだと思います。農家さんからすれば同じ手間をかけて育てた野菜なので、安さを求めるというよりも、農家さんが希望する価格で買い取りたいんですよね。

—— なるほど、野菜のことだけではなく、農家さんのことも考えたうえで活動していると。買ってくれている飲食店さんも、安いからというより、高橋さんたちの想いに共感している部分が大きいのでしょうか。
はい、そうだと思います。もちろん正規品よりは安いんですが、規格外であることを気にしないお店ばかりで、わたしたちの活動を応援してくれています。

My Menter

笑いあい、高めあい、 中学からずっと一緒の先輩

—— 2人はどういう関係なんですか？
高橋 菜子先輩はわたしの1つ上で、中学校も高校も、そして大学も一緒なんです。中・高の部活まで一緒に。とても尊敬しています。
福田 ワカはひとことで言うとかわいい後輩ですね。でも親友に近いというか、何でも相談しあえる存在でもあります。
高橋 わたしの部活（アメフト部マネージャー）のことや就

職活動のことなど、菜子先輩にいろんな話を聞いてもらって、自分の心を整理しています。でも真剣な話をしているけど、いつのまにか転げ落ちるほど笑っていることが多いです（笑）
福田 たしかに（笑）

—— お互いの存在から学べることは？
高橋 菜子先輩のまわりには人がたくさん集まってくるんですよ。それは一人ひとりに対してきちんと時間を使っているから。わたしもそうやって丁寧に人と接することができるようになりたいです。

福田 ワカから学んでいるのは、目標をもつことの大切さかな。そして、それに向けて努力を惜しまないところはすごいなと思っています。わたしは就職で東京に行くことになったので、これまでのように頻繁には会えな

くなるけど、これからもお互いに高めあっていけたらいいなと思っています。
高橋 そうですね。菜子先輩はわたしのなかでは唯一無二の存在なので、これからも深い話をしたり、笑いあったり、いつまでもよろしくお願いします。



Mako
Fukuda

福田 菜子 さん
経営学部 1部
経営学科 4年





人と人をつなぐ、元・人見知り

——ところで野菜の買い取りの資金はどうやって？

最初は自分たちがアルバイトをして貯めたお金をかき集めて始めました（笑）。それで買い取らせていただいて、少し利益分を乗せてお客さんに買っていただいています。ガソリン代もけっこうかかるので、そんなに大きな利益にはなっていませんが、いまは損をしなければいいかなぐらいの気持ちでやっています。

——活動を通して新たに意識するようになった問題などはありますか？

人手不足で困っている農家さんが多いということですね。せっかく育てた野菜も、手が回らなくて全部を収穫できないという話をよく聞くので、農家さんと学生をつなぐことで解決できればと。わたしはアメフト部のマネージャーもしているので、部員に収穫を手伝ってもらうことを始めました。学生はアルバイト代やお米などをもらえて、農家さんにとっては人手不足の解消につながりますので、この動きを部活内だけに留めず、もっと広く展開できたらと考えている段階です。

——農家さんも学生もうれしい、そしてフードロスも減るということでもいいことづくめですね。

そうですね。いろいろなかたちで北海道の野菜のフードロスを少しでも削減できるように動いていきたいです。ちなみにわたしたちは活動当初から「食品ロス貢献kg数」として、これまで取り扱ってきた野菜の量を計算しているんですが、この2年間で7トンに達しました。今後もどんどん増やしていきたいです。

——ところで高橋さん自身は昔から農業に関心があったんですか？

母が家庭菜園をやっていて、父を巻き込んで余市にも畑をもつようになったり。考えてみれば、祖父母や親戚も、家で食べるものは家でつくればいいという考えの人が多くて、この活動を始める前から農業はそんなに遠い存在ではなかった感じですね。

——なるほど、大学に入っていきなり野菜というよりは、小さなころからずっとそばにあったと。ちなみにどんな子ども時代だったんですか？

自然とふれあうことを大切にしている幼稚園に通って

いたので、芋を育てたり、鶏の卵を採ったり、なぜかヘビを首に巻いたりしていました（笑）。そんな感じで育ったので、いまでも畑でミミズが出ようが、まったく抵抗がないですね。

——いまの高橋さんから想像すると、とても活発で元気いっぱいのお子さんだったんでしょうね。

いえいえ、こう見えても小さいころは人見知りが激しかったんです（笑）。ずっとお兄ちゃんの後ろに隠れているような感じで。そんななか、小学校低学年のころに家族でドイツに住むことになりまして。父の仕事の都合で1年半ぐらい。当然わたしは日本語も通じないし全然馴染めませんでした。一方の兄はすぐくて、ドイツの子どもたちとどんどん仲良くなっていくんです。それで日本に帰ってきたときに、日本語が通じるんだからコミュニケーションなんて何も難しくないじゃないかという気づきがあり、そのころからペラペラしゃべるようになりました（笑）

まだ存在しないリンクをたくさん

——中学校・高校はどんな感じで？

中高6年間、ソフトテニス部に入っていました。朝練して授業を受けて、お昼を食べて昼練して、午後の授業を受けて部活、みたいな生活でしたね（笑）。それでももう大学では選手はいいかなと思って、サポートする側に回ったらどんな感じなんだろうということでアメフト部のマネージャーを始めたという経緯です。

——大学で英米文化学科を選んだのはどうして？

札幌国際情報高校にいたので、校名のとおり英語を使って世界情勢などを学ぶような機会が多かったんです。1年生のうちに英検2級を取ることが全員の目標という感じで、とにかく英語漬けの毎日でした…。

——ドイツでの苦痛がよみがえったのでは？

はい、地獄かと思ってました（笑）。でもそのおかげでけっこうみんな英語を話せるようになって。苦しかったですけど成長できたと思います。その流れのなかで、海外のことをいろいろ学んでみたいと思い、英米文化学科に入学しました。

——これまでの大学での学びで興味深かったのは？

文化人類学です。世界の少数民族についての学びがとくに印象に残っています。わたしはもともと性的なマイノリティについては関心をもっていたのですが、民族的なマイノリティについて学び、自分の知らない世界がまだまだあるなと感じました。すべての人が気兼ねなく自分らしく生きられること、そのために貢献できるようにつながり、リンクをたくさん生み出していけたら、世の中はもっと楽しくなると思います。

——高橋さんたちの活動もリンクを生み出していますね。規格外野菜と飲食店さん、農家さんと学生など、みんながハッピーになるようなリンクを。そんな活動とリンクするような大学での学びはありますか？

いまの活動と直接関係があるかはわかりませんが、ゼミでアグリテックについて学んでいます。アグリカルチャー（農業）とテクノロジーを掛け合わせた言葉です。農業にAIを活用することで農業従事者の負担を減らすなど、さまざまな可能性があると思っています。卒論のテーマにする予定です。

——4年生になっても、おもしろ野菜マルシェの活動は続けていくんですね？

はい、もちろんやります。わたしたちが大学を卒業したあとも、この活動が少しでも長く続いていくように、興味をもってくれたゼミや部活の後輩たちにしっかりと引き継ぐ年にしたいと思います。そのためにも就職活動を早く終わらせなければ（笑）

——ちなみに長いスパンでの目標はありますか？

これは中学校のころから思っているんですけど、45歳ぐらいになったら、その時点で勤めている会社を早期退職して、パン屋さんをやりたいんです（笑）

——パン屋さん、最後にいきなり来ましたね（笑）

いきなりなんですけど、ずっと夢なんです。丘の上に建っていて、海の見えるパン屋さん。早起きしてパンを焼きながら、少しのんびりできるような。いまはバタバタと生きているので、そういう暮らしがいつかできたらと。けっこう頑なな目標なんです。

——それまであと20年以上ありますね。

なかなか遠い道のりですね。実現できるまでは忙しく生きていこうと思います（笑）

My Friend

楽しく、ときにバチりながらの社会貢献を友だち3人で

——高橋さんと松浦くん、そしてもう1人の上山くん、高校の同級生だった3人で「おもしろ野菜マルシェ」を展開しているということですが、その発端は？

松浦 高校を卒業し、上京してキャンパスライフを楽しもうと思っていたんですが、ちょうどコロナ禍が始まってしまい、大学にも行けず暇だなと（笑）。それで何かをやりたい、どうせなら社会に貢献できることをやりたいと思って、和佳奈や上山と話していたら、いくつかのテーマが出てきて。最終的には農業というテーマで、フードロスや規格外野菜をなくそうという取り組みを始めることにしました。まずは2年生の夏休みにマルシェをやってみようと、野菜を提供してくれる農家さんや開催できる場所を探したのが始まりですね。

高橋 わたしたちが1・2年生のころはコロナで本当に何もなくて、だからこそマルシェで農家さんやお客さんと接す

ることができたのはすごく楽しかったよね。

松浦 たしかに。最初は規格外野菜を販売することだけに執着していたけど、マルシェでいろんな人と話すことができたのがすごくよかった。

高橋 それとわたしはもうひとつ、3人で何度も何度も話しあったことが楽しかったな。もちろん意見がまとまらなくて大変なときもあったけど、考える力がついた気がするし、3人のミーティングの経験はいま、授業や部活での話し合いにも生かされていると思う。

松浦 自分の意見と和佳奈の意見が真逆だったりすることも多くて（笑）。バチってるなという雰囲気を感じた上山がバランスをとってくれてね。

高橋 わたしたち2人、自分の意見のほうがいいでしょ!と思っちゃうタイプなので（笑）

松浦 でも意見が対立するのはいいことかなと。そこから新しいアイデアが生まれることもあるから。

——大学生活最後の年、マルシェは？
高橋 もちろん続けます。野菜を通じて人と人とのつながりをつくることのできる活動だと思っているので、また新し

い出会いを探していきたいと思います。そして次の世代につないでいけたらと思っています。

松浦 2人とも就活と並行してマルシェもやっていくことになりましたが、どちらも精一杯やって、あわよくば、これで食べていけるようにがんばります（笑）



My Favorite Place



eK Wagon
MITSUBISHI MOTORS

考えたり、楽しんだり、眠ったり いろいろできちゃう、もう1つの部屋

わたしの好きな場所……んー、車の中です（笑）。畑に行ったり、配達をしたり、そういうときは1人きりで運転しているので、いろいろと考えごとができる時間なんですよ。だから運転中に音楽をかけなくても全然いける派です。家には車が2台あって、わたしがメインで使っているのは三菱のeKワゴン。かなり年季の入った、白い軽自動車です。もともとおじいちゃんが使っていた車で、お兄ちゃんに下がってきて、いまはほぼわたし。これから正式にわたしの車になる予定です。アメフト部の練習にも車で行きます。自宅から清田にあるグラウンドまで40～50分。まっすぐ向かうのはつまらないので、ぐるっと回って紅葉を見ながら行くとか、スタバで飲みものを買ってドライブがてら行くとか、そういう楽しみ方ができるのも車のいいところ。先日は茱子先輩（p.2）と江別まで陶芸をしに行ってきました。ところでわたし、運転中に眠くなることはないんですけど、家に着いてエンジンを切った瞬間、わたしのエンジンも切れちゃうことが。車移動のときは荷物がけっこう多くて、それを家に入れる気力が湧かず、そのまま30分ほど寝ちゃうことがあるんです。なので、クッションや掛け布団を置いて快適に寝られる空間にしています（笑）。まるでもう1つの部屋ですね。

My Favorite Things



段ボール箱

段ボール箱とガムテープは「おもしろ野菜マルシェ」の活動に欠かせない、わたしたちの商売道具ですね（笑）。5kg箱と10kg箱を使って、それぞれ一度に100枚とか200枚とか大量に買います。かぼちゃやたまねぎなどを置いておける通気性のいい倉庫を自宅近くに借りているので、そこに段ボール箱もストックしています。配達日には、5箱ほどを車に積んで畑に向かい、野菜を受け取ったら詰めて各配達先へと車を走らせています。ちなみに倉庫にはマルシェで使うのぼりなども収納しています。



革の鞆

大学に入学する際、札幌駅にあるセカンドハンド（中古品）のお店で買った大きな革の鞆です。学校に行くときにリュックよりも気が引き締まるかなと思いついて。戦時中に使われていたメッセンジャーバッグと同じ形だというエピソードも込みで一目惚れして買いました。



ロードバイク
RALEIGH

中学生のときに観た映画『ジュノ』で高校生が乗っているロードバイクがカッコよくて。わたしも高校生になったら絶対乗りたい!と、親に交渉して買ってもらいました。これでサイクリングをすることが多いです。通学のときは野菜を積める荷台付きの自転車に乗ってます（笑）



リップ
SUQQU

リップは毎朝、絶対に濃い色を塗るようにしています。なぜなら、やる気が出るから(笑)。スイッチが入ります。だから化粧をするときも、まず最初にリップを塗ってやる気を出します。何本か濃い色のリップを持っていますが、SUQQUの使用頻度がいちばん高いですね。



ピアス

映画『ゴースト』のデミ・ムーアに憧れ、高校の卒業式の日にバツサリとショートカットにしてピアスの穴を開けました。それから常にピアスを付けています。朝にリップを塗って、ピアスを選んでから、服を決めます。服よりもピアスが先。小ぶりで単色のデザインが好きです。



ソックス
無印良品

靴下は基本、白しか履かないんですよ。あえて汚れが目立つ色を履くことで、きれいなのかどうかすぐにわかるのがいいなと。母に「首と足元をきちんとしていればきれいに見えるよ」と言われて育ったので。ちなみにアルバイトをしている無印のものを主に愛用しています。



ヘアケア用品
davines

母の天然パーマを受け継いでいるんですが、その遺伝を大事にたく、縮毛矯正やパーマはかけずに、素の髪の毛で生きようと。そのためヘアケアは大切にしていって、トリートメントオイルやヘアマスクにはお金をかけています。ダヴィネスというブランドがお気に入りですね。



小説

左：うつくしが丘の不幸の家 / 町田 そのこ（著） / 東京創元社
右：本日は、お日柄もよく / 原田 マハ（著） / 徳間文庫

地下鉄では本を読んでいます。なぜか女性作家さんの小説を選ぶことが多くて、今日持ってきたのは、原田マハさんの『本日は、お日柄もよく』と、町田そのこさんの『うつくしが丘の不幸の家』です。想像力を掻き立てられる読書の時間は、わたしにとってすごく大切です。



キャップとバイNDERとSDカード

この3点はアメフト部のマネージャーとして欠かせないアイテムで、うちの部のロゴが入っています。バイNDERには練習のときに選手に指示を出すための書類が収められています。アメフトは分析のスポーツなので、選手の動きを撮影した映像を収めるSDカードも必携ですね。